



「復興九州へのチャレンジ」を語ろう  
阿蘇大会実行委員会委員長 榑木 武

九州の中央に位置する阿蘇山は、九州の象徴。その中岳からの噴煙は、道づくし大会 in 阿蘇2022の烽火であり、はためくテーマは「復興九州」です。

九州では、万年前から人々が暮らし、文明・文化を発展させてきました。しかし、その途次で様々な大災害に見舞われ、絶え間ない苦闘が強いられています。

とりわけ最近では、地震・津波・台風の襲来、大規模な水害・土砂崩壊、これらのもとをなす気候変動、さらに人々の絆・縁を問うコロナ禍、そして深刻化する人口減高齢社会による「五大災難」へと様変わりし、私たちの前に立ちほだかっています。これらを乗り越え、道守活動が、地域にどのように寄与するかが問われています。そこで、本年の道づくし大会は、「五大災難」に立ち向かうこれからの道守活動について大いに語り合いたいと企画しました。

阿蘇を文字通りに読めば「原点に戻って蘇る」となり、また、「道は見つける、なければ作る」ともいわれます。これらを念頭に道守活動再起の課題をとらえれば次のとおりです。

まずは、五大困難の中で、道守活動をどのように工夫してきたかを振り返り、今後を探ることです。五大困難は、いずれも人の手に負えず、どうすればよいか途方にくれます。それでも、例えば火山や地震などを目の当たりにして私たちは慄き暮らすも、安全の確保に努め、火山の恵みを生かし、困難の壁に挑んでいます。越えられない壁はないと信じ、努力と工夫の道守活動を集大成し、どのよう将来に繋ぐか、その道筋をつけることです。

一方で、持続可能な地域づくりに役立てる道守活動が考えられます。すなわち、道守活動の目的に、皆さんの貢献を地域や環境への

取組に生かし、生涯の地、暮らしの地を持続可能とし、地域発展に寄与することです。17ゴールを網羅するSDGsをガイドに、地域の人々や諸組織と道守が一層協働し、様々な地域活動、生活や暮らしに役立つ道守活動のあり方を模索することです。

これらの課題を合わせると、結局は私達道守の活動の舞台が「道」であることに尽きます。つまり、道は三つの意味を持ちます。「人やモノが往来し、情報をつたえる道」、「人々が究める文明・文化の道」、「および「人々が集い暮らす地域の道」。かつて、それらを辿りながら、災害は「忘れたころやってくる」と戒められ、備えることを主に対処してきました。しかし、現代の五大災難は「忘れずにやってくる」であり、九州の諸地域がこぞって苦悩する異常な事態です。ならば、日頃から常にそれを乗り越えるため、視野を広げ、「三つの道」を探る道守のチャレンジと貢献が、今後に望まれ、工夫が求められています。

折しも紅葉が彩なす山の秋。苦難の復興九州を語らう傍ら、涅槃像なす阿蘇五岳の鼓動に耳を澄まし、彷彿と湧く温泉につかり、互いに勇気を養いましょう。

今回のみちづくしは地震から復興した「阿蘇」で、久しぶりに一同に会して開催します。スケジュールは次のとおりです。

●令和4年10月28日(金)・29日(土)

<b>1日目</b>	会場：阿蘇プラザホテル
交流会	13:30~17:00
<ul style="list-style-type: none"> <li>・功労者表彰</li> <li>・基調講演 平時時と災害時の地域の強靱性～交通ネットワークの重要性と事例～</li> <li>・阿蘇からの報告</li> <li>・フロアミーティング</li> <li>・大会宣言</li> </ul>	
大庭照子ミニコンサート	17:10~17:50
郷土芸能 横堀岩戸神楽	17:55~18:15
交流集会	18:30~20:00

●2日目 (詳細は、10ページに掲載)

現地体験学習	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・やまなみ・滝室坂トンネルコース</li> <li>・南阿蘇インフラコース</li> </ul>	

基調講演



災害と地域づくり  
道守活動の貢献を考える  
九州大学工学部土木工学科教授 塚原 健一

災害は非常時の対応、地域づくりは平時時の活動と一般的には捉えられています。しかし災害対応の活動と地域づくりの活動は別々のものなのでしょうか？平成28年に発生した熊本地震により大分自動車道は湯布院付近で大規模な被害を受けましたが、上下4車線が完成していたため迅速な復旧が可能となりました。一方で同年北九州市から宮崎市までの開通を祝った東九州自動車道は平成30年の西日本豪雨のため椎田南IC付近で発生した法面崩落により1ヶ月以上の不通を余儀なくされました。復旧に長期を要した一因として上下2車線の整備しかなされておらず復旧作業に困難を要したためです。

ご承知のとおり大分自動車道の上下4車線の整備は災害対策を目的としたものではなく交通網の整備による地域づくりを目的とした平時時の活動の成果ですが、それが災害の非常時にも機能することを示した良い例です。令和2年の球磨川流域における水害でも同様でした。豪雨により人吉盆地に通じるほぼ全ての一般国道が被災し通行止めとなるなか、九州自動車道が機能を維持し、被災地の復旧復興に大きな役割を果たしました。

「地域の交通の利便性が低い↓地域の活力が低下する↓低い地域力と低い交通利便性のためひとたび災害が起こると復旧復興が困難↓地域力がさらに低下する」これが災害と地域衰退の負のスパイラルです。これを「交通の利便性が高い↓地域が活性化する↓災害が起こっても地域力と交通網による他地域との繋がりで復旧復興が進む」というプラスのスパイラルに転換して行く必要があります。

基調講演では災害と地域づくりの関係、強靱な交通網の整備を軸として、南海トラフ地震への備えと、オランダにおける人口20万人程度の小規模都市でも高い交通利便性により人口100万人規模の都市に負けない繁栄を果たしている事例を紹介しながら説明します。

後半の第2ステージでは活力があり災害に強い九州を実現するためのこれからの道守の役割について議論します。地域の活性化や交流人口の増加など地域づくりの観点から道守福岡会議と道守長崎会議から活動を紹介してもらいます。次に災害と地域づくりの視点から災害への備えと道守活動について道守宮崎会議から、災害訓練と連携した町づくり活動について道守鹿児島会議から紹介頂きます。九州・沖縄道の駅駅長会議からは地域づくりや災害対応に関して道の駅の果たす役割についてお話を頂きます。

また、フロアミーティング全体をつうじて、地域づくり、道守活動に精通した方々をアドバイザーとしてお招きしコメント頂きます。

●プロフィール

塚原健一 九州大学工学部土木工学科教授。昭和37(1962)年生まれ。福岡県立福岡高校から九州大学土木工学科に進み、1998年建設省(現国土交通省)に入省。在インドネシア日本大使館一等書記官、アジア開発銀行都市開発専門官、九州地方整備局河川調査官等。国内外の社会資本整備に携わる。2011年4月より九州大学大学院教授。

阿蘇市からの報告①



九州地方整備局 統括防災官 辻 芳樹

熊本地震で被災した南阿蘇村の阿蘇大橋地区では、大規模な斜面崩落とともに、国道57号、JR豊肥本線が被災し、阿蘇大橋は落橋するなど、道路、鉄道の大動脈が寸断されました。国土交通省では、阿蘇地域の道路などのインフラの復旧に取り組みました。

俵山トンネルルートはトンネルの補修工事と合わせ、被災した橋梁を避けたミニバイパス整備や旧道を活用し応急復旧を完了。それまで迂回路となっていた1000級級の山間部を通るグリーンロードから大幅な時間短縮、また冬季の積雪・凍結時の不安を解消し、震災後の12月にクリスマスプレゼントだと地元の方々には喜ばれました。

阿蘇長陽大橋を震災前の性能へと回復させ、崩壊斜面の対策を行い、平成29年8月の二学期の始業前に応急復旧が完了しました。

また、令和元年9月の俵山トンネルルート of 全線供用、令和2年10月には大規模崩落斜面の対策完了と国道57号現道部の復旧完了と段階的に復旧していききました。

令和3年3月に完成した新阿蘇大橋は、将来的な地震に備えた構造的な工夫を行い、24時間施工や最新工法を導入し、大幅な工期短縮を実現しました。震災から5年後、すべての阿蘇地

域への主要なアクセスルートが回復しました。令和4年の春、国土交通省が実施した熊本地震の復旧は全て完了しました。

阿蘇市からの報告②



阿蘇市経済部観光課 秦美 保子

災害からの地域復興の足取り

阿蘇市においては熊本地震(日28年発生)からの復興に当たっては厳しい一面がありました。平成24年7月未明に発生した九州北部豪雨での甚大な被害。市内中心を流れる一級河川黒川が至る所で氾濫。山腹崩壊箇所334カ所、死者21名。ここ内牧温泉も浸水被害に遭い当時は復旧支援補助金もほとんど無く、其々お金を工面して復旧工事に当たられました。ようやく復興が見えてきた矢先に熊本地震に遭い、築いたものが再度壊れる、激甚災害指定が2つ重なるという厳しさを味わいました。更に地震では多くの道路と鉄道を失い、内牧温泉街は地面がずれ温泉まで止まってしまい、どこから見ても絶望的

でしたが、指揮を執る市長が絶え間ない努力をされ生活者優先の中、産業も大事と崩落していた阿蘇山道路、水道施設復旧に早期着手、また20軒もの温泉掘削工事が補助金を活用し行う事ができました。工事が始まると事業者の皆さんに「希望」が生まれてきます。顔を上げると自然はいつも通り美しい。大事な財産は残っている。そんな心持ちで日々頑張ってきたと思います。無我夢中の10年間。振り向くと、国土交通省のご尽力により自然災害に強い阿蘇谷に生まれ変わっています。国や県、また各ボランティアの方々への支援に心から感謝し、「教訓」を柱に更なる復興につなげていきたいと思えます。